13　色絵金彩三珍果文花瓶　初代中村秋塘

昭和三年（一九二八）　陶磁
径一四・六、高二四・八

一点

本作の七宝繋ぎに見られる赤絵と金彩で塗り埋める技法は、江戸時代後期からつづく九谷焼の赤絵金彩の伝統を受け継いだものである。しかし、文様を過剰に細密化していった明治期の輸出九谷焼の文様描写とは異なり、文様と絵付け部分の境界を明確にした洗練された表現となっている。また口縁部の外側と脚部は、青手九谷の技法である。一方、絵付けの方は、三方に木瓜形の窓を開けて桃と枇杷、柘榴を、染付と近世から九谷焼を特徴づける緑、黄色、紫の透明感のある絵具を用いて描いている。このやや厚みのある淡い色調の絵付けは、中国陶磁の豆彩を連想させ、それに加えて、箱書きに「三珍果模様」と書かれた三つの果実は、それぞれ中国では古来より桃は長寿、枇杷は富、柘榴は子孫繁栄を意味する吉祥文様として表されてきたものである。伝統を組み合わせながらも、近代の九谷焼の新しさを感じさせる作品である。

作者の中村秋塘（一八六五～一九二八）は九谷焼の名工・竹内吟秋の門下で、磁胎に赤絵で細密な絵付けをほどこす、赤絵細描の名手として知られる。大正十五年（一九二六）の米国独立一五〇年記念フィラデルフィア万国博覧会に大日本窯業協会を代表して出品、最高大賞を受賞した。本作の完成年は作者の没年に当たるが、大正十三年（一九二四）の皇太子（昭和天皇）の御成婚に際して文武官一同より献上された《鶴桐蒔絵螺鈿飾棚》に付属する棚飾品のうちの一点。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

古典再生——作家たちの挑戦

三の丸尚蔵館展覧会図録No. 72

編集　宮内庁三の丸尚蔵館

制作　株式会社 東京美術

翻訳　黒川廣子

発行　宮内庁

平成二十八年三月二十六日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan